

# 近代の経済学者佐々木多門がイギリス高級紙The Timesに 寄稿した記事を特定する研究—形態素分析を援用して—

丹藤 永也\* 佐々木 紀人\*\* 佐藤 剛\*\*\*

## 1. はじめに

佐々木多門は、明治から大正にかけて日本の経済界で活躍した、青森県平内町出身の経済学者であり、英文筆家である。佐々木(2013)によると、多門はそのネイティブ・スピーカー並みの高い英語力から、東北大学等で英語の教鞭を執ったり、高橋是清に請われ日本銀行に入行したりと、英語人として多くの業績を残している。

その業績の1つに、昭和初期にイギリスの高級紙The Timesに東京通信員(Our Tokyo Correspondent)として記事を寄稿していたことが挙げられる。このOur Tokyo Correspondentという肩書きは、執筆者名の代わりに付けられているものであるが、佐々木(2013)によると、当時の東京通信では主に2つの肩書きが使用されていたことが判明している。1つがOur Own Correspondentで、もう1つがOur Tokyo Correspondentである。当時の外務省情報部が発行した『外国に於ける新聞 下巻(支那以外の諸外国之部)』では、The Timesを含む当時のイギリス新聞界の慣例として、「海外通信の冒頭にはOur Own Correspondentと記載してあるものと単にOur Correspondentと書いてあるものの二種類がある。前者は当該新聞社員たる特派員即ちstuff correspondentを指し、後者は社員ならざる通信員を意味するものである」<sup>1)</sup>と説明している。つまり、これをThe Timesの東京通信に当てはめて考えると、Our Own CorrespondentがThe Times本社の「新聞社員たる特派員」であり、Our Tokyo Correspondentが「社員ならざる通信員」と考えるのが妥当である。

本研究の目的は、多門がThe Timesに寄稿した

記事を特定することであるが、一番の困難点は、The Times紙面に多門の名前が掲載されていないばかりでなく、The Times本社や東京支社に記録も残っていなかったということである。当時のThe Timesは、軍部や国家主義者からの迫害を恐れ、紙面や本国との通信記録に名前を残していないことがその理由である。佐々木(2013)は、The Times本社に多門の記録が残っていないか問い合わせ<sup>2)</sup>をしているが、アーキビストからの返答は、①タモン・ササキの記録は残っていない、②東京支局が独自に執筆を依頼したと考えられる、③当時の不安定な社会状況下では東京と本社の通信記録に通信員の名前は絶対残さない、というものだった。

このようなことから、本当に多門が執筆していたのか、そして、もし執筆していたとしたらどの記事が多門のものなのかは特定できていなかった。そういった中、丹藤・佐々木(2015)は、それまでの資料の精査に加え、新しい資料として、多門の甥にあたる佐々木高精の証言記録<sup>3)</sup>(以下「佐々木高精証言録」と、1938年1月15日発行の『英語青年』<sup>4)</sup>の記事を発見し、それらを総合的に分析することで、多門がOur Tokyo CorrespondentとしてThe Timesに記事を寄稿していたと結論づけている。

ただ、丹藤・佐々木(2015)では、Our Tokyo Correspondentのどの記事が多門が書いたのかまでは解明していない。実際に、多門が寄稿していたとされる時期以外にも、The Timesには、この肩書きによる記事は多数掲載されている。例えば、1885年に神奈川県横浜水道工事顧問土木工師として来日した英国人陸軍工兵であるパーマー<sup>5)</sup>は、日本の水道事業の近代化に奔走する傍ら、1885

※青森公立大学准教授  
\*\*平内町立小湊中学校教諭  
\*\*\*弘前大学講師

年から1893年までの8年間、The Timesの東京通信員として主に政治、外交、経済情勢などに関する記事を約60本寄稿している。「社員ならざる通信員」であった彼が新聞で使った肩書きは、やはりOur CorrespondentやOur Tokio Correspondentであった。

そこで本研究では、佐々木（2013）が指摘している多門がThe Timesに寄稿していたとされる1926年から1937年の約11年間に対象を絞り込み、Our Tokyo Correspondentの肩書きで書かれた記事の中から多門のものを特定することを試みる。しかし、多門とThe Timesの関係を示す資料が極端に少ない中、直接的資料を新たに発掘するのは至難の業であるため、本研究では、形態素分析を援用して計量的な観点から筆者を推定する手法を取り入れ、多門が書いた記事を特定する。この点において、本研究は人文科学とコンピュータ解析の融合という大変独創性の高い特徴を有する。これまでの先行研究から、欧米諸語の文献に対する、書き手の識別を目的とした計量分析の有効性は広く報告されており、その信頼性は高く、この手法を本研究に採用することは合理的である。さらに、今後記事をデータ化しコーパスを構築することから得られたデータを活用すれば、多門の思想的テーマを文体・語彙論の視点から把握できることが予想され、これまでは印象や主観に頼るほかなかったマクロレベルの解釈を、科学的・客観的に行うことができるようになる。

そして、多門の記事を特定することの価値は、当時日本が軍国主義に突入し、国内の言論空間が日を追うごとに狭められていく中、海外の論壇に日本の実情を書き記した多門の主義・思想を明らかにすることにある。これまで我が国では、戦前に日本人が外国の新聞や雑誌に発表した英文記事を発掘し考察するという研究がなされてこなかった。それは、当時日本人が外国の主要メディアに英語で書いた記事を寄稿することは想像さえできなかったことであり、実際にその事実はほとんどなかったからである。よって、戦前多門がThe Timesに英語の記事を寄稿していたということを明らかにした佐々木（2013）の研究は、当時の日本国内の状況や日本

の世界的な立場について英語で発信した日本人の存在を発掘した点において非常に貴重であると言える。このことは、戦前のジャーナリズムに新たな研究対象を提供するという点で、日本の近代史研究に大きなインパクトを与えたものと考えられる。このように、当時一人の日本人がジャーナリストとして世界に認められたことを明らかにすることは、日本のジャーナリズムの歴史の中で偉大な業績であると言える。

## 2 研究方法

### 2.1 基準となる記事の設定

まず、この形態素分析を援用した分析では、基準となる記事を設定しなければならない。しかし、前述のとおり、掲載記事には署名がないため、多門の記事を特定できない。そこで本研究では、佐々木（2013）が指摘する多門がOur Tokyo CorrespondentとしてThe Timesに寄稿していたと考えられる期間の中から、「佐々木高精証言録」をもとに記事の精選を行い、さらにはその中から多門によって書かれたことを客観的に示唆する表現を含んだ記事を選ぶこととする。

「佐々木高精証言録」とは、多門の生家である青森県平内町にある社家・日光院の協力を得て保存資料の調査を行った際、同院から提供を受けた高精の証言を記録した2本のカセットテープを文字起こしたものを指す。これらのテープは、1997年11月に高精が独協大学名誉教授であった蝦名賢造（経済学博士）の書面による質問に答える形でその回答を録音したものと、1998年5月21日に行われた高精と蝦名との対談を録音したものである。高精は多門の書生として13年間多門に仕えた人物であり、その証言は具体的に信頼性が高い。またこの証言録は、これまで調査した資料の中で、多門のOur Tokyo Correspondentとしての活動について唯一具体的に言及したものである。以下、The Timesの内容に関する記述を抜粋する。

「佐々木高精証言録①」（1997年11月）より

- おじさんは日本銀行の現役のときからロン

ドンタイムスをやっている、いよいよ定年の60歳が近づいた時、ロンドンタイムスは「貴殿は銀行を辞めるそうだね。定年したら通信員になってくれないか」と。

- 満州事変に関しては、イギリスやアメリカが寄ってたかって日本を悪者にしました。だからおじさんは、いかにしてあのようになったかということロンドンタイムスに書いて、政府からとても褒められました。
- ロンドンタイムスの仕事をする時は、日本銀行のタイピストを使いました。男のタイピストです。タイピストはおじさんの原稿をタイプライターで打ってきて、いよいよそれをロンドンタイムスに送るといときには、慶応大学にケンブリッジ大学を出たイギリスの教授がいたんだが、この人に必ずその原稿をチェックしてもらいました。
- おじさんはとても褒められました。日本の満州事変の立場を、何でそうなったかということ外国の新聞に書いたんです。
- ロンドンタイムスの通信員になってくれないかと誘われました。それはもう、まるで名誉なことでした。みんなは、「なにもやらないで、ロンドンタイムスの通信員の仕事ばかりやって、どうするものだろう」って心配しました。そしたらおじさんはね、「これは名誉なんだ。今まではこんなことはないんだ」と言っていました。日本銀行の人もみんな、「これは佐々木さんでなければできない」と言っていました。コレスポンデントつうもんです。東京ロンドンタイムス通信員です。しょっちゅうその仕事にかかりきりになっていました。

「佐々木高精証言録②」（1998年5月）より

- 阿佐ヶ谷にいたころは、ロンドンタイムスがしょっちゅう家に来ました。また、要人たちとしょっちゅう会っていたために、憲兵が2人も3人も家にいるんです。そして、「大将いるか？」って聞くんです。
- おじさんは2年にわたって満州のことをロンドンタイムスに書いてるんですよ。

- ある時、ロンドンタイムスの車が来て、その時、うちのおじさんが（憲兵らしき男たちを）怒ったことがあるんですよ。

まずは「佐々木高精証言録」をもとに、扱うべき記事の対象期間を設定する。佐々木(2013)は、多門が正式にThe Timesに寄稿し始めたのが、日本銀行を退職した1926年10月頃であり、筆を置いたのが、病気のために執筆できなくなった1937年の11月頃だと指摘<sup>6)</sup>している。

次に着目するのは、「おじさんは2年にわたって満州のことをロンドンタイムスに書いてるんですよ」という証言である。この証言に基づけば、どこかの期間において満州に関わるOur Tokyo Correspondentの記事が集中的に見つかることを考え、満州事変が勃発する1931年から1937年11月までに期間を絞り、The TimesのアーカイブからOur Tokyo Correspondentの記事を洗い直した。その結果、1931年7月から1934年2月の約2年半の間にOur Tokyo Correspondentによる寄稿が17本あり、そのうちの12本は満州に言及する内容だったことが確認された。特に、1932年5月7日から1933年4月28日までの間には、集中的に7本もの記事で満州のことに言及するなど、明らかにその頻度が突出している。さらに「高精証言録」に照らせば、多門は満州における日本の立場を擁護していたとされるが、この期間に執筆された記事はどれも日本を擁護する立場を取っており、これも証言録との整合性を示すものであった。

## 2.2 分析対象とするThe Times寄稿記事

今回形態素分析の対象とした記事は、全部で33本である。前述の多門が書いた可能性が高い12本のリストは表1に示すが、他の21本は、恐らく多門ではないだろうという仮定のもと時期的に異なる記事を3本、時期的には多門が書いていた時期と重なるが内容が満州とは関係のない記事を18本、ランダムに選抜した。なお、今回分析対象とした33本の記事のリストは巻末の資料に示すこととする。

表 1 多門が書いたと仮定される記事のリスト

No	year/date	The Titles
1	19310710	EXPANSION IN MANCHURIA / FLOOD OF CHINESE IMMIGRANTS
2	19310727	THE GROWTH OF JAPAN / FOUR BABIES A MINUTE / ABSORBING THE INCREASE
3	19320116	PARTY TACTICS IN JAPAN / THE CHANGE OF GOVERNMENT
4	19320507	THE FUTURE OF MANCHURIA / A JAPANESE VISION
5	19320808	MANCHUKUO / AT WORK IN THE WILDERNESS / THE CASE FOR JAPAN
6	19320917	"JAPANESE MONROE DOCTRINE " / ATTITUDE TO ASIA / REPORTED SUGGESTION OF MR. ROOSEVELT
7	19321004	JAPANISM / A NATIONALIST VISION
8	19321201	THE JAPANESE VIEW / VITAL CLAIMS IN MANCHURIA / A PLEA FOR PATIENCE
9	19321220	RESOURCES OF JAPAN / THE MILITARY APPETITE / AN UNBALANCED BUDGET
10	19330428	PRODUCTION IN JAPAN / FIGHTING THE DEPRESSION
11	19330817	JAPAN AS A BORROWER
12	19340215	THE THRONE OF MANCHUKUO / PU-YI'S STATUS

これらの記事は、これまで述べてきたとおり、多門が書いたものである可能性が高いが、再度精査した結果、多門が書いたという直接的証拠は見つけることはできなかった。しかし、今回日本人が執筆したことを示唆する表現の発見に至った。執筆者が日本人であることを確認できれば、それが多門である可能性は一層高くなる。例えば、1931年7月27日に発表された「THE GROWTH OF JAPAN」<sup>7)</sup>の中にある以下の表現である。

So by a process of exhaustion we come to industrialization, the officially accepted policy which

successive Governments pursue by tariffs and subsidies and the fostering of exports.

この記事で筆者は、「人口増加が大きな問題となっている日本だが、産児制限が移民政策の代替になり得るにもかかわらず、内務大臣は日本を人口過多とさえ捉えていない。よって、今後の日本の課題は、過去のように日本製品の販路を拡大できるかどうかにある」と述べている。「we」という言葉が含まれる上記の英文は、「だから私たちは、消耗しながらも産業化しているのだ。それは、歴代政権が関税・補助金・貿易の促進によって続けてきた公的政策なのである」

と訳すことができる。これは、内務大臣の「我々は避妊具の販売さえ禁じてきたのである」という言葉に続くものであり、これを文脈から判断すると、「we」が日本人を指すのは明白である。

また、1932年12月1日に発表された「THE JAPANESE VIEW / VITAL CLAIMS IN MANCHURIA / A PLEA FOR PATIENCE」<sup>8)</sup>の中にある表現も同様である。

Without pretending to assess the merits of the case for the former course - too presumptuous a task for a resident of Tokyo - the writer proposes to present some reasons for the exercise of patience.

これは、丹藤・佐々木（2015）でも指摘されているが、この中にある「too presumptuous a task for a resident of Tokyo」という表現は、直訳すれば「東京住民としておこがましいかもしれないが」となる。仮に、「a resident of Tokyo」を一般的に「東京の住民」と解釈したとすると、そこには東京に住む外国人も含まれてしまうため執筆者の特定にはつながらない。しかし、英字新聞における首都の名称は地名としてだけではなく、その国の「政府」の意味でも使われ、首都は政府の代名詞となる。つまり、「Tokyo」は地名としての「東京」という意味のほかに「日本国政府」の意味でも使われるということである。Washingtonなら「米政府」、Beijingなら「中国政府」を示すことになり、この解釈でいくと、「a resident of Tokyo」には「日本政府が存在する東京に居住するひとり」、「日本政府の立場を支持する立場の日本人のひとり」というニュアンスが生まれ、この記事は日本人によって書かれたものである可能性が高いと考える。

さらに、この記事には以下の表現も含まれている。

No one contends that in this dispute all the blame lies on Japan. Should we agree that Japan violated the peace treaties, we must also agree that the treaties provided no remedy for the persistent evils of which she complained.

この表現を訳せば、「今回の論争においては、全ての非が日本にあると主張する者はいない。万が一、私たちが日本は平和関係諸条約を侵犯しているということを認めるとすれば、同時に日本が強い不満を抱いている頑固な中国に対して、なんら制裁を加えることのないその諸条約をも私たちは認めなくてはいけなくなる」となる。この場合における「we」も、日本あるいは日本人の立場を代弁していることが読み取れ、同一記事の中に前述の「a resident of Tokyo」という表現が出てきたことも考慮すれば、この記事は日本人によって書かれた可能性が高いことを示唆している。

以上のことが、これらの記事を分析に採用した理由である。

### 2.3 分析方法の解説と手順

著者推定には、文字数、単語の頻度やコロケーションなど様々なベクトルが考えられるが、今回はトピックの異なる記事を分類することがねらいであることから、内容の影響をできるだけ受けのないものをベクトルとして採用することが必要である。そこで、ここではその中でもより信頼性の高いN-gramによる形態素分析を試みる。N-gramモデルは確率・統計的自然言語処理の分野では非常に広範囲に使われている言語モデルである。N-gramは文字や単語の連結の集合であり、直前の文字のみを扱う場合を2-gram (bigram)、直前の2つの文字を扱う場合を3-gram (trigram)と呼ぶ。例えば、I like soccer.という英文からは以下のように12種類の3-gramが抽出される。

C E R, K E \_, C C E, O C C, \_ S O, E R \_, E \_ S, I K E, I \_ L, \_ L I, L I K, S O C

このような、3-gramの分布の傾向から、何らかの書き手の特徴を洗い出し、分類できないかどうかを検討する、つまり、多門と仮定する記事に共通の特徴を見出し、多門とそれ以外の記事に分類する、というのが本研究のねらいである。

## 3 分析

### 3.1 分析方法

本研究では、書き手の傾向を明らかにするために、33の記事から3-gram頻度上位20を抽出し、これを分析対象とした。多門によって書かれた記事を特定するために、3-gramを活用することにより、記事のジャンルや内容の影響を避けることができる。

しかし、33の記事の長さが大きく異なるため、得られた3-gramの総数は、最大値が13208語、最小値が1866語と大きな差があることがわかった。そこで、それぞれの記事について3-gramの粗頻度を、一定の基準によって調整する必要がある。これを調整頻度と呼ぶ。粗頻度を1つの基準に

よって調整することで、総語数が異なっても、頻度の相互比較が可能である。調整頻度の基準値は、一般的にデータの下限值を超えない範囲で最も大きな10の乗数を用いる。本研究では、すべての3-gramを1000語レベルに調整し、それを基礎データとして分析に用いることとする。これにより、記事の文字数による不均等の影響を少なくすることができる。結果、表2のような頻度表を得た。また、変数として抽出された頻度上位20の3-gramとその記述統計量は、以下の表3のとおりである。

表2 記事別の3-gramの頻度

	_T_H	T_H_E	H_E_	_O_F	O_F_E_D_	_I_N_	A_N_N_D_	A_N_D_	T_O	I_N_	O_N_	T_O_	I_O_N	E_R_	_N_G_	I_N_G	N_T_E_S_			
△tokyorebuilt	17.78	15.53	14.20	7.87	7.25	5.21	6.44	9.30	8.58	8.07	4.90	5.11	3.17	3.27	2.25	4.90	0.00	3.68	3.17	5.62
△japanesediet	24.41	21.30	18.86	7.07	6.57	7.49	6.40	5.56	4.80	4.80	5.30	3.87	5.47	4.97	4.13	4.46	5.30	5.30	4.29	3.62
△twimdipl	20.78	16.87	15.38	9.45	8.91	5.53	7.29	6.07	4.59	4.59	5.26	4.72	5.80	4.59	6.61	4.59	3.51	3.51	4.86	2.43
◎chineseimmigrants	17.82	15.27	14.48	8.27	8.11	6.36	9.07	3.82	3.34	4.30	7.96	6.84	5.25	5.57	4.30	4.30	4.93	4.30	5.09	3.98
◎growthofjapan	19.78	16.15	13.58	9.25	8.66	5.73	8.19	7.26	6.32	6.32	4.92	4.56	5.73	4.80	6.55	4.92	3.16	3.51	3.74	3.86
◎partytactics	19.73	15.43	14.48	7.56	7.14	8.19	7.45	4.83	4.72	4.72	5.14	4.62	4.83	3.88	4.93	4.41	4.20	3.67	1.57	
△embassiestokyo	22.01	20.49	18.60	6.96	6.58	5.44	3.67	4.05	7.21	6.33	3.54	3.29	2.53	2.78	1.14	3.80	4.17	5.06	3.16	6.07
◎futureofmanchuria	18.77	16.14	14.78	8.27	6.90	5.74	5.54	6.52	5.93	5.83	4.86	4.08	4.77	4.47	5.54	2.33	3.31	3.40	2.82	4.57
◎farmersplight	22.44	17.62	16.51	10.20	9.83	5.01	7.98	4.27	5.19	4.82	3.90	5.38	5.38	2.78	4.08	5.94	4.27	4.27	2.60	4.08
◎manchukuo	21.07	18.38	16.99	10.40	9.65	6.50	8.07	6.31	6.40	5.20	5.48	5.85	7.05	4.83	5.85	4.08	3.53	3.34	4.73	2.51
◎japanesemonroe	18.78	17.15	14.97	7.62	7.08	4.90	5.99	6.53	4.90	4.90	4.90	3.81	4.08	4.08	5.17	5.99	3.27	2.72	2.45	3.54
◎japanism	19.85	15.66	14.85	7.70	7.70	4.73	5.67	5.67	6.21	5.27	6.48	4.46	3.51	6.35	4.32	3.24	1.76	1.76	3.78	3.92
◎japaneseview	21.82	18.17	15.73	7.31	7.11	5.58	6.70	6.19	6.19	5.79	5.89	4.77	4.36	5.18	4.47	3.86	3.05	2.74	3.35	3.86
◎resourceofjapan	19.94	17.14	15.97	9.21	8.74	7.11	6.53	5.60	6.18	5.48	5.36	4.90	4.08	4.55	4.31	4.78	3.50	3.73	4.90	5.13
◎productioninjapan	19.09	16.09	14.41	9.00	8.64	6.96	9.12	5.52	4.56	4.56	5.88	7.44	4.44	5.16	3.48	5.16	4.44	4.20	4.56	4.68
◎japanasborrower	22.02	17.45	15.79	9.97	9.14	5.82	6.23	4.99	4.99	4.57	3.74	3.32	4.57	4.15	6.65	5.40	3.74	4.15	2.91	4.99
◎crowdedjapan	23.04	20.02	18.58	8.93	8.81	6.63	7.48	7.60	6.63	6.51	4.22	4.95	4.95	3.38	5.43	5.31	5.19	4.58	4.34	5.07
◎throncofman	19.70	15.70	14.69	9.18	8.35	5.18	6.01	7.51	6.01	6.51	7.18	5.18	4.51	6.34	3.51	3.84	4.68	4.17	4.17	2.00
△moderationinjapan	23.54	19.52	14.81	7.81	7.35	5.05	6.78	5.40	4.71	5.05	7.58	6.78	5.28	7.92	5.86	3.79	2.76	2.53	4.71	2.53
△temperofjapan	25.92	21.38	18.54	8.04	7.66	6.43	5.58	5.39	5.58	5.01	3.88	4.26	5.96	3.97	5.39	4.73	4.45	4.16	4.54	3.22
△emergencyninjapan	24.68	20.59	16.49	9.67	9.18	7.69	6.20	8.06	7.94	7.94	5.21	4.46	4.71	4.84	7.07	2.73	2.60	2.48	3.72	3.84
△prayerbook	23.05	20.62	18.80	7.28	6.07	10.01	3.94	6.07	5.76	5.16	6.37	3.94	5.76	5.76	5.16	4.25	5.16	6.07	3.64	1.82
△recoerdexports	19.24	16.59	15.87	11.78	11.78	7.70	11.30	5.53	5.29	6.01	5.53	8.18	4.09	4.57	3.61	4.57	4.57	4.81	4.81	4.81
△mutinyintokyo	21.98	20.94	17.43	8.19	5.98	11.32	4.16	6.63	6.24	6.24	6.63	3.25	2.21	5.59	1.69	5.07	5.20	4.42	3.12	3.38
△dualismofjapan	23.96	20.26	19.06	8.84	7.90	6.96	4.29	5.15	5.41	5.32	3.95	3.43	4.98	3.69	6.01	4.72	3.43	3.01	3.01	3.61
△bushidoandbudget	22.18	18.55	17.72	7.57	6.51	6.89	6.66	5.83	6.74	6.59	4.62	4.62	4.47	4.16	6.06	3.79	5.38	4.47	3.94	3.86
△landreclamation	18.76	16.08	15.54	9.11	8.04	7.50	4.82	8.57	11.25	11.25	11.79	4.29	4.82	5.36	3.75	4.29	3.22	2.68	4.82	2.68
△ambitionsofjapan	21.31	18.74	14.94	8.09	7.99	6.37	7.90	6.94	6.47	6.75	4.19	5.04	5.23	4.19	4.95	4.28	3.14	3.14	4.19	5.42
△japanathepolls	21.42	18.05	15.44	5.89	5.40	6.95	5.31	5.79	5.69	4.63	5.40	3.38	4.05	4.92	4.73	5.02	2.90	2.70	4.05	4.25
△japanatwar	21.42	18.27	15.12	6.30	5.54	7.18	4.66	5.80	6.68	6.30	4.16	5.42	4.28	3.53	3.28	3.28	7.56	6.30	4.28	4.03
●feedingdeer	26.09	20.28	14.99	10.23	10.05	5.82	6.70	10.23	8.64	8.11	5.29	5.99	2.82	3.70	1.23	7.76	5.29	5.82	3.88	4.94
●littltrade	24.83	20.69	17.49	9.78	9.59	4.51	5.08	11.28	11.10	10.53	3.39	4.70	3.20	2.82	1.13	6.77	7.52	7.71	3.39	6.39
●sageofjapan	23.78	18.55	17.84	9.75	9.04	11.41	6.42	7.85	8.80	7.85	3.09	7.37	3.57	2.14	2.14	4.28	4.76	6.66	4.99	2.85

表3 記述統計量

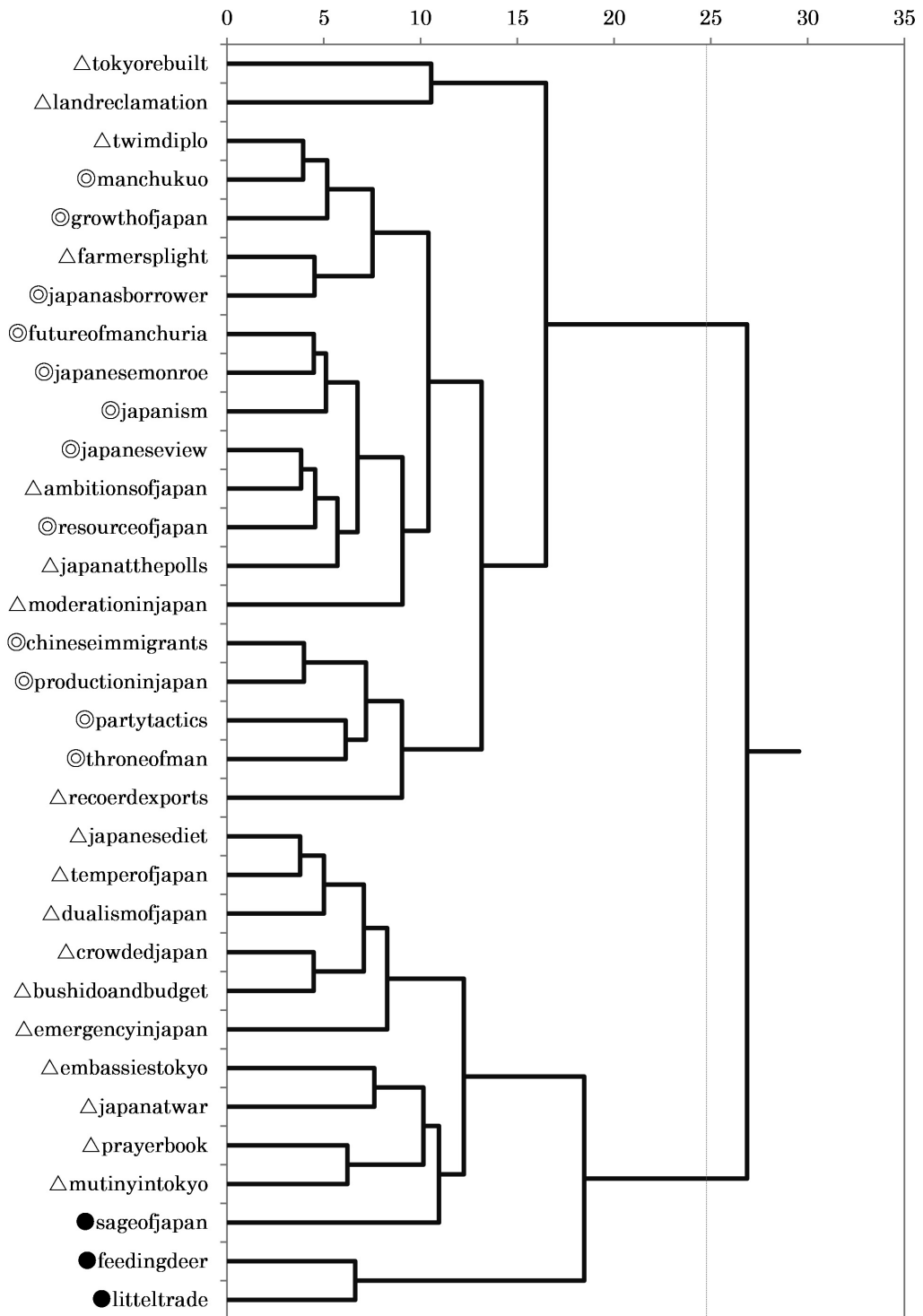
3-gram	<i>M</i>	<i>SD</i>	95% CI
_ T H ( <i>n</i> =33)	21.54	2.29	[21.17, 22.65]
T H E ( <i>n</i> =33)	18.17	1.98	[17.77, 19.25]
H E _ ( <i>n</i> =33)	16.14	1.61	[15.67, 17.15]
_ O F ( <i>n</i> =33)	8.56	1.29	[7.78, 9.25]
O F _ ( <i>n</i> =33)	7.97	1.43	[7.17, 8.65]
E D _ ( <i>n</i> =33)	6.66	1.68	[6.07, 7.55]
_ I N ( <i>n</i> =33)	6.47	1.64	[5.56, 7.04]
_ A N ( <i>n</i> =33)	6.42	1.67	[5.76, 7.24]
N D _ ( <i>n</i> =33)	6.33	1.75	[5.70, 7.18]
A N D ( <i>n</i> =33)	6.10	1.64	[5.43, 6.91]
_ T O ( <i>n</i> =33)	5.32	1.65	[4.46, 5.94]
I N _ ( <i>n</i> =33)	4.93	1.26	[4.10, 5.58]
O N _ ( <i>n</i> =33)	4.53	1.05	[3.73, 5.21]
T O _ ( <i>n</i> =33)	4.52	1.18	[3.70, 5.18]
I O N ( <i>n</i> =33)	4.35	1.66	[3.54, 5.02]
E R _ ( <i>n</i> =33)	4.58	1.07	[3.88, 5.36]
N G _ ( <i>n</i> =33)	4.06	1.45	[3.43, 4.91]
I N G ( <i>n</i> =33)	4.10	1.33	[3.49, 4.96]
N _ T ( <i>n</i> =33)	3.93	0.75	[3.17, 4.65]
E S _ ( <i>n</i> =33)	3.91	1.20	[3.20, 4.68]

平方ユークリッド距離を用いたワード法によりクラスター分析を行い、33の記事のクラスター分けを行った。その結果、各記事を20の3-gramを変数に分類した結果を図1に示す。多門が書いた

たと考えられる、満州に関する内容のものは「◎」で示し、時期的に多門が書いたとは考えられない1923年11月から12月の間に書かれた3本を「●」、それ以外の記事を「△」で示している。

図1 デンドログラム

樹形図





### 3.2 結果

デンドログラムから2つのクラスターに分類した。各クラスターに含まれる記事の数は、第1クラスターが20本、第2クラスターが13本である。つまり、この結果の意味するところは、それぞれのクラスターは同一の執筆者によって

書かれている可能性が高いということである。各クラスターに含まれる記事の詳細は表4のとおりである。さらに、それらの結果の記述統計量を表5に、クラスターごとにプロフィールしたものを図2に示す。

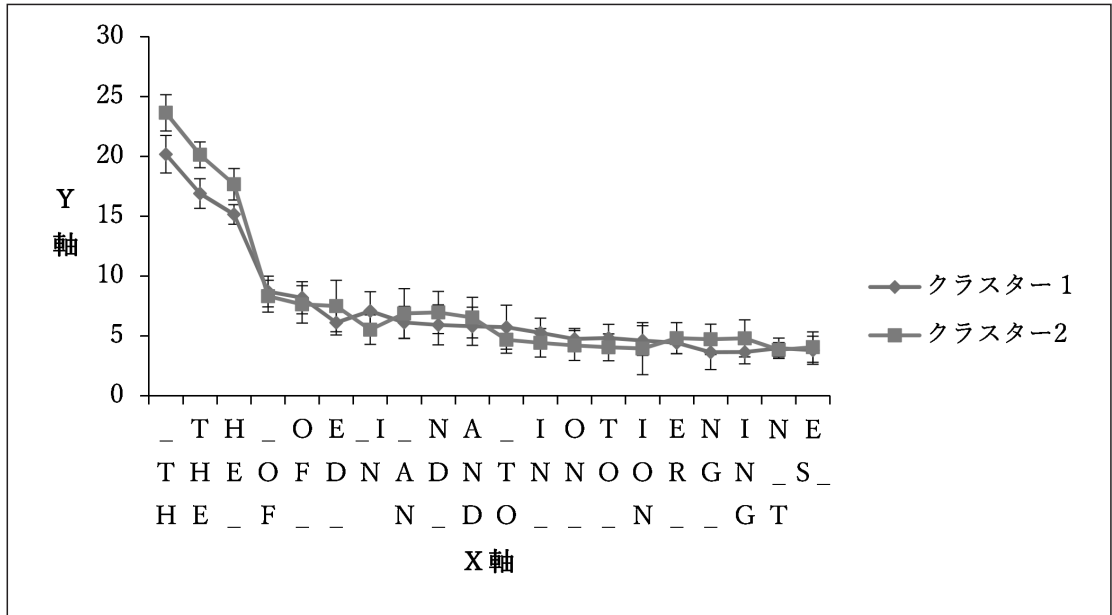
表4 クラスター別個体分類

クラスター1	クラスター2
△19300325 Tokyo rebuilt	△19310226 the Japanese diet
△19360831 land reclamation	△19350215 the temper of Japan
△19310529 twin diplomacy	△19360427 the dualism of Japan
◎19320808 Manchukuo	△19331208 crowded Japan
◎19310727 the growth of Japan	△19360714 bushido and a budget
△19320705 farmers' plight in Japan	△19350410 emergency in Japan
◎19330817 Japan as a borrower	△19320203 new embassies in Tokyo
◎19320517 future of Manchuria	△19371009 Japan at war
◎19320917 Japanese Monroe doctrine	△19350729 the prayer-book in Japan
◎19321004 Japanism	△19360413 the mutiny in Tokyo
◎19321201 the Japanese view	●19231211 a sage of Japan
△19370211 ambitions of Japan	●19231116 feeding deer
◎19321220 resources of Japan	●19231126 little tradesmen of Tokyo
△19370430 Japan at the polls	
△19341025 Moderation in Japan	
◎19310710 flood of Chinese immigrants	
◎19330428 production in Japan	
◎19320116 party tactics in Japan	
◎19340215 the throne of Manchukuo	
△19360211 record exports and budget deficits	

表5 各クラスターの記述統計量

Item	Cluster 1			Cluster 2		
	Mean	SD	95% CI	Mean	SD	95% CI
_ T H	20.18	1.57	[19.83, 20.53]	23.64	1.52	[23.22, 24.06]
T H E	16.90	1.24	[16.62, 17.17]	20.13	1.08	[19.83, 20.43]
H E _	15.15	0.82	[14.97, 15.33]	17.68	1.32	[17.31, 18.04]
_ O F	8.72	1.28	[8.42, 9.00]	8.32	1.33	[7.95, 8.69]
O F _	8.20	1.34	[7.89, 8.49]	7.64	1.56	[7.20, 8.07]
E D _	6.12	1.03	[5.88, 6.34]	7.50	2.14	[6.91, 8.09]
_ I N	7.09	1.61	[6.72, 7.44]	5.53	1.23	[5.18, 5.87]
_ A N	6.13	1.34	[5.832, 6.42]	6.88	2.07	[6.30, 7.45]
N D _	5.93	1.67	[5.55, 6.29]	6.96	1.76	[6.47, 7.45]
A N D	5.82	1.59	[5.45, 6.17]	6.54	1.70	[6.06, 7.01]
_ T O	5.73	1.84	[5.32, 6.14]	4.68	1.12	[4.37, 4.99]
I N _	5.26	1.23	[4.98, 5.53]	4.42	1.18	[4.09, 4.75]
O N _	4.75	0.87	[4.55, 4.94]	4.21	1.25	[3.859, 4.55]
T O _	4.83	1.15	[4.56, 5.08]	4.06	1.12	[3.74, 4.36]
I O N	4.62	1.24	[4.34, 4.89]	3.95	2.17	[3.34, 4.54]
E R _	4.42	0.90	[4.22, 4.62]	4.82	1.29	[4.46, 5.17]
N G _	3.64	1.44	[3.31, 3.96]	4.72	1.27	[4.36, 5.07]
I N G	3.66	0.98	[3.43, 3.87]	4.80	1.54	[4.37, 5.23]
N _ T	3.98	0.85	[3.78, 4.17]	3.85	0.60	[3.68, 4.01]
E S _	3.81	1.18	[3.54, 4.07]	4.07	1.27	[3.71, 4.42]

図2 クラスターごとの平均値のプロット



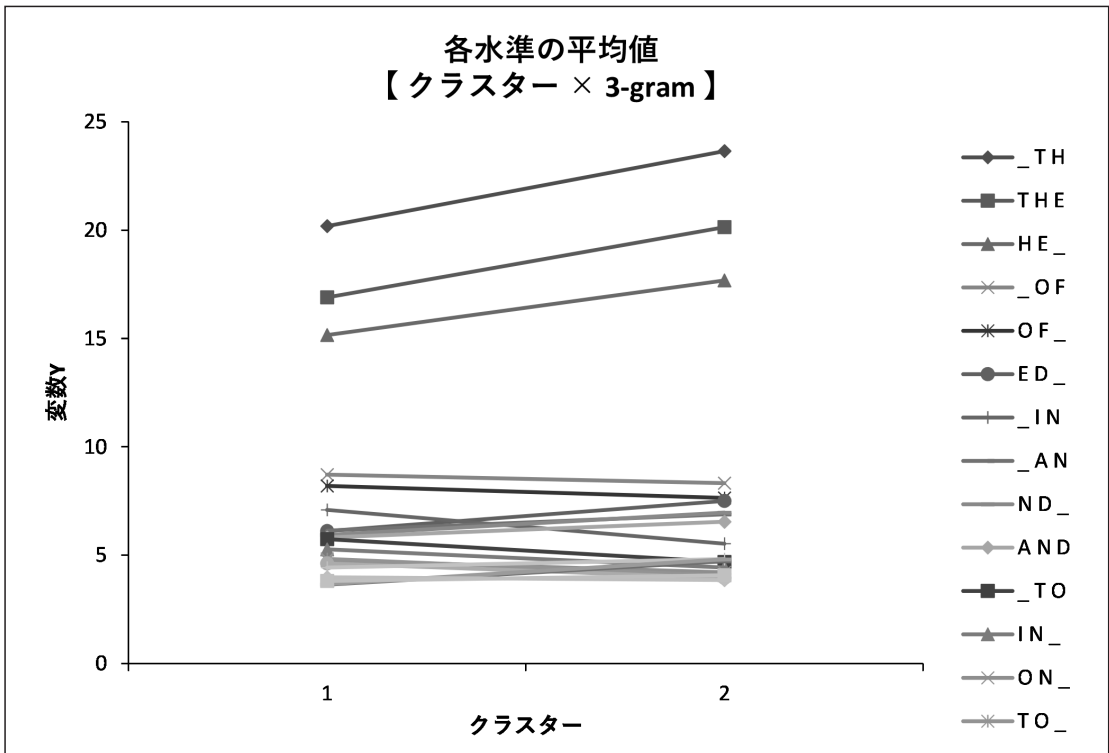
それぞれのクラスターにはどのような違いがあるのかについて、2つのクラスターと頻度上位20の3-gramとの関連を二元配置の分散分析により検討した。その結果、以下の表6のとおり、クラスターと3-gramの交互作用は、 $F(19,589) =$

$8.83, p=.00$ 、3-gramの主効果は、 $F(19,589) = 487.05, p=.00$ 、クラスターの主効果は、 $F(19,589) = 8.57, p=.00$ でありいずれも有意であった。この結果を図示すると、図3のようになる。

表6 分散分析表

要因	平方根	自由度	平均平方	F値	p値
3-gram	16140.98	19	849.52	487.05	.00
クラスター	292.83	19	15.41	8.83	.00
3-gram×クラスター	35.55	1	35.55	8.57	.00
誤差	1027.33	589	1.74		

図3 クラスタと3-gramの交互作用



クラスタの主効果の検定を行い、上位20の 以下の9つの3-gramが5%水準で有意であった。3-gramのどこに差があるのかを検討した結果、

\_TH (Cluster 1 < Cluster 2)、THE (Cluster 1 < Cluster 2)、HE\_ (Cluster 1 < Cluster 2)、ED\_ (Cluster 1 < Cluster 2)、\_IN (Cluster 1 > Cluster 2)、ND\_ (Cluster 1 < Cluster 2)、\_TO (Cluster 1 > Cluster 2)、NG\_ (Cluster 1 < Cluster 2)、ING (Cluster 1 < Cluster 2)

4 考察

表7のようになり、以下のとおり特徴づけることができる。

以上のことから、2つのクラスタの特徴は

表7 各クラスタの特徴

クラスタ	特徴
クラスタ1 (n=20) (多門と仮定される)	定冠詞 the の使用が少ない 前置詞 in や to の使用が多い 過去形や ing の動詞の活用が少ない
クラスタ2 (n=13) (多門と仮定されない)	定冠詞 the の使用が多い 前置詞 in や to の使用が少ない 過去形や ing の動詞の活用が多い

このように、クラスター分析により多門と仮定したものと多門以外と仮定されたものがきれいに分類されていることがわかる。さらに、クラスター×3-gramの分散分析では、交互作用・2つの主効果とも有意な差が出ている。これらのことからクラスター1とクラスター2には異なる性質があり、よって2つのクラスターは異なる筆者によって書かれた可能性が高いと言える。また、△の記事についても●が含まれるクラスターに分類された記事は多門ではない可能性が高く、逆に◎に含まれるクラスターに分類された記事は多門によって書かれた可能性が高いと考えられる。

## 5 おわりに

本研究の目的は、多門がThe TimesのOur Tokyo Correspondentとして寄稿した記事の特定を試みることであった。形態素分析の結果、今回取り上げた記事のうち、特に表1に示した12の◎の記事は同一の筆者に書かれた可能性が高く、内容も併せて検討すると、これらは多門である可能性が高いと結論づけることができる。さらにクラスター1に分類されたその他の△の記事も同一筆者、つまり多門によって書かれた可能性が高いと言える。

今回は、形態素分析と内容面からのアプローチにより、20の記事が多門である可能性が高いという結果を得たが、逆に、当初、Our Tokyo Correspondentという肩書きは多門一人によって使われていたと予想したのに対し、今回の形態素分析によってこの肩書きをもつ他の執筆者が存在した可能性も示された。

今後の課題は、引き続き歴史的資料の中から多門が書いたとする直接的証拠の発見に努めるとともに、形態素分析を継続して、今回取り上げられた記事と同類に振り分けられる他の記事を探し、多門が書いたすべての記事を特定したいと考える。そして、多門の当時の主義・思想を明らかにしたいと考えている。

(2016年11月30日受付、2017年1月12日受理)

## 謝 辞

本研究は、公益財団法人青森学術文化振興財団からの助成を受け、2016年度青森公立大学地域研究センタープロジェクトの一環(研究テーマ：佐々木多門が英紙ザ・タイムズに寄稿した記事の特定を試みる研究Ⅰ～コーパス言語学における形態素分析を援用して～)として行われた。ここに関係各位に対し深く感謝の意を表する。

## 註

- 1) 外務省情報部『外国に於ける新聞 下巻(支那以外の諸外国之部)』(外務省、1932) pp.5.
- 2) 2011年1月、佐々木紀人はThe Times本社に対して電話で調査依頼をしている。
- 3) 「佐々木高精証言録①」(1997)と「佐々木高精証言録②」(1998)を参照。
- 4) 1938年1月15日付研究社『英語青年』「佐々木多門氏略傳」pp.34.
- 5) Henry Spencer Palmer (1838-1893).
- 6) 1937年11月21日付の多門による高精宛書簡によって明らかになっている。
- 7) The Times(1931) “THE GROWTH OF JAPAN / FOUR BABIES A MINUTE / ABSORBING THE INCREASE”, July 27th, 1931, *The Times*.
- 8) The Times(1932) “THE JAPANESE VIEW / VITAL CLAIMS IN MANCHURIA / A PLEA FOR PATIENCE”, December 1st, 1932, *The Times*

## 引用、参考資料及び文献

- 青森県日光院 (1997) 「佐々木高精証言録①」.  
青森県日光院 (1998) 「佐々木高精証言録②」.  
青森県日光院 (1937) 『佐々木多門書簡』.  
研究社 (1938) 『佐々木多門氏略傳』、『英語青年』、研究社.  
佐々木紀人 (2013) 『佐々木多門伝 世界と戦った風雪の英語人』、東奥日報社.

佐々木多門（1907）『経済学派比較評論』、六盟館。

丹藤永也・佐々木紀人（2015）「近代の経済学者 佐々木多門とイギリス高級紙The Timesに関する考察」、青森公立大学研究紀要。

樋口次郎（1982）『黎明期の日本からの手紙』、筑摩書房。

樋口次郎・大山瑞代（1987）『条約改正と英国人ジャーナリスト H・S・パーマーの東京発通信』、思文閣出版。

細谷千博・斉藤真・今井清一・蠟山道雄（1972）『日米関係史4 開戦に至る十年 マス・メディアと知識人』、東京大学出版。

## 資料

本研究で分析対象とした記事のリスト

NO	year/date	The Titles
1	19231116	FEEDING THE DEER / REFUGEES IN A JAPANESE PREFECTURE
2	19231126	LITTLE TRADESMEN OF TOKYO / RINGING OF MANY BELLS
3	19231211	A SAGE OF JAPAN / CRITICISM OF MEN AND THINGS
4	19300325	TOKYO REBUILT / CHARACTER OF THE NEW CITY / CHANGES SINCE THE EARTHQUAKE
5	19310226	THE JAPANESE DIET / FROM THE GALLERY / A SITTING OF THE HOUSE
6	19310529	"TWIN DIPLOMACY" IN JAPAN / THE CANADIAN EXAMPLE
7	19310710	EXPANSION IN MANCHURIA / FLOOD OF CHINESE IMMIGRANTS
8	19310727	THE GROWTH OF JAPAN / FOUR BABIES A MINUTE / ABSORBING THE INCREASE
9	19320116	PARTY TACTICS IN JAPAN / THE CHANGE OF GOVERNMENT
10	19320203	NEW EMBASSIES IN TOKYO / BUILDINGS OF CHARACTER
11	19320517	THE FUTURE OF MANCHURIA / A JAPANESE VISION
12	19320705	FARMERS' PLIGHT IN JAPAN / FOR AND AGAINST A MORATORIUM
13	19320808	MANCHUKUO / AT WORK IN THE WILDERNESS / THE CASE FOR JAPAN
14	19320917	"JAPANESE MONROE DOCTRINE " / ATTITUDE TO ASIA / REPORTED SUGGESTION OF MR. ROOSEVELT
15	19321004	JAPANISM / A NATIONALIST VISION
16	19321201	THE JAPANESE VIEW / VITAL CLAIMS IN MANCHURIA / A PLEA FOR PATIENCE
17	19321220	RESOURCES OF JAPAN / THE MILITARY APPETITE / AN UNBALANCED BUDGET
18	19330428	PRODUCTION IN JAPAN / FIGHTING THE DEPRESSION
19	19330817	JAPAN AS A BORROWER / COMING ISSUES
20	19331208	CROWDED JAPAN / THE NEED OF MORE OUTLETS / A TEN-YEAR TESTING PERIOD
21	19340215	THE THRONE OF MANCHUKUO / PU-YI'S STATUS
22	19341025	MODERATION IN JAPAN / AIMS OF THE NEW CABINET / AN UNBROKEN POLICY
23	19350215	THE TEMPER OF JAPAN / ARMS AND THE PEOPLE / A GENERAL STAFF MIND
24	19350410	EMERGENCY IN JAPAN / INFLUENCE OF THE ARMY
25	19350729	THE PRAYER-BOOK IN JAPAN / A QUESTION OF NATIONAL IDIOM
26	19360211	JAPAN / RECORD EXPORTS AND BUDGET DEFICITS
27	19360413	THE MUTINY IN TOKYO / DEMONSTRATION OF FORCE
28	19360427	THE DUALISM OF JAPAN / NEW BUILDING ON OLD DOCTRINE / A RISKY EXPERIMENT
29	19360714	BUSHIDO AND A BUDGET / PARADOX IN JAPAN / THE CREED OF THE TRIM YOUNG OFFICER
30	19360831	LAND RECLAMATION IN TOKYO BAY / £4,000,000 PROJECT
31	19370211	AMBITIONS OF JAPAN / INDUSTRY AND THE SERVICES / CONTROL OF RAW MATERIALS
32	19370430	JAPAN AT THE POLLS / PARLIAMENT AND ARMY / FREEDOM WITHOUT CHOICE
33	19371009	JAPAN AT WAR / TRAIN AND STREET SCENES / THE WHITE BOX FOR THE ALTAR

# Identification of The Articles Written by Sasaki Tamon in The Times by Utilizing Morphological Analysis

Hisaya TANDO      Norihito SASAKI      Tsuyoshi SATO

## **Abstract**

The previous study shows that Sasaki Tamon had contributed articles to The Times as a correspondent in Japan for about eleven years. However, among the total Times articles of the period, those written by Sasaki have not been clearly identified. Thus the purpose of this study is to identify the articles written by Sasaki in The Times by utilizing morphological analysis. A total of 33 articles were examined according to the contents, the time of contribution and their morphological pattern (frequency of their 20 types of 3-grams). As a result, 12 articles can be assumed to be written by Sasaki based on their contents, but three were eliminated based on their time of contribution. The results of cluster analysis show that the 33 articles can clearly be divided into two groups: one that includes the 12 articles by Sasaki and one that included the three proven not to be by Sasaki. As there was significant difference between the two clusters, these findings support our assertion that it is probable that the 12 articles, together with the others in that cluster, were written by one author that we can assume was Sasaki.